
この道は未知に満ちる

E O N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この道は未知に満ちる

【Nコード】

N2849Q

【作者名】

EON

【あらすじ】

神様、転生、最強……俗に言われるテンプレ。

良くある話に過ぎないが流行りに乗るようにここにも一人の男がこの世から異世界へと旅立つ。

誰かが言った「きっと彼は幸運だ」
誰かが言った「きっと彼は不幸だ」

さて、果たして彼はどちらだろうか。

プロローグ（前書き）

初めてしまいました、EONと言います。

この作品は昨今流行りで恐らく食傷者を多数輩出しているネギま、転生、最強物です。ハーレムやアンチが入れば完璧かな？…要見当ですね。

何がしたいかと言われればテンプレを使って何かを書いて見たかったと、ただそれだけです。

プロローグ

神様。それは絶対な何かであり、都合の良い何かだ。何せ存在が確認されていない、つまりは全部誰かのイメージな訳だ。

だから人によつては土下座する間抜けまで神様で御座いと言い張れる。暇潰しに人の命を塵芥のように消してみる者もいる。まあつまり何が言いたいかと言うと。

「だから何でプロローグ冒頭で神様土下座させて謝罪させるんだよ……」

意味が分らんと溜め息を吐く。今開いていたページをALT+F4キーを押し即抹消。ウィンドウの右下を見ればもう良い時間だった為にそのままログオフ。

身支度を整えて下に降りる。そこにはつい最近義姉になった美幸さんと弟の将が美味しそうな朝ご飯を食べていた。

「おはよう二人とも」

「おはよう晃仁君」

「コウ兄おは」

自分の席に座れば温いお味噌汁と白いご飯が美幸さんの手によつて運ばれて来た。父親の再婚で出来た姉だが面倒見がいいせいか既に馴染んでいる。料理上手なのも原因か、早々に胃袋を掌握されてしまった。

「親父達の帰りは明日だったけ？」

尋ねながらチャンネルを変える何時も見ているアレはまだ始まって
おらずCM中だ。

「そうよ」

間延びした姉の返事に苦笑を一つ。新婚旅行代わりに欧州巡って来
るとか言った時には驚いたがまあ俺達も家事程度ならどうとでもな
る。

「今日の占い！先ずは血液型から」

始まったのはいつも見ている比較的中率の高い占い。朝のニュー
ス番組の一コーナーでしかないのだが、何故かこの番組は血液型か
ら始まって誕生月、星座それらを男女別に行うのだ。

「……男性のAB型は極端な一日、良い事が悪い事か、何が起きる
にしても貴方の人生に大きく関わるでしょう。ラッキーアイテムは
黄色のハンカチ。女性の……」

ふむと内容を吟味、そして横から姉の白い手が差し出される、そこ
に握られているのは某ネズミ王国の蜂蜜好きが描かれている黄色い
ハンカチ。なんともいえない気分のまま邪気の無い笑みに抗う術も
無く受け取ってしまう。

「2月生れの男性！貴方は今日究極の選択を迫られるかも！目上の
人の話はよく聞いて、それがきつと貴方を助ける指針になる筈」

「男性魚座の貴方！貴方の今日の運勢は1と6しか出せないサイコ
ロのよう。どちらが出るかは貴方次第、けれど気を付けて、不幸の
賽の目も0にはならないから。ラッキーアイテムは親しい人の御守

り」

ふむ？何故かどれもこれも似たような結果ばかりだな。そしてやはり差し出される姉の御守り、苦笑しながら受け取る。ふと時計を見れば学校へ向う時間だ。

「行つて来ます！」

「お姉ちゃん今日6限入ってるから！」

「飯は作っておく、期待はしないでね」

行つてらっしゃいという声を背中に家を出た。

いつもと変わらない時間の過ごし方で半日が過ぎた。特に何かある訳でも無く。財布を開く度に姉から預かった御守りが見えるのには苦笑ものだったが。意識が御守りに逸れたその一瞬、6時だというのに暗い周囲を眩いばかりの明りが覆った。覚えているのはここま

で。

「やあ」

目の前には恰幅の良い30頃の男が立っていた。

「どうも？」

うんうんと嬉しそうに頷きながらこちらを見ている。

「あの貴方は？」

「うん？ああ初めましてだね私は神様とか呼ばれる世界的な奴隷さ」

……思考の停止に陥った事を責められる人はいないと思う。

「しかし君は運が良い、先程まで3人程多元数甲728界に送った所なんだがね？後一人必要だったんだ。君の本来の転生先は犬だった筈けどもう一度人間でいられるよ」

「さて、先程までの男達同様君にもあの世界で生きて行く、そして厄介事に関わっても生きていける力とやらをあげなきゃね。最近の事故死者は皆声高に力を寄越せと言うから気乗りしないんだけどね？」

言葉も出せないうちに男が言葉を連ねる。そして自分の事がまるで初めからこうであるといわんばかりに決っていく。

「先ずはサイコロ振ろうか？要望とか聞き出すと纏まる話も纏まらないしね。数を制限するとそれだけで文句言い出すのもいるんだもん嫌になるよね？」

「ああ、簡単に説明するよ？君は今から4回サイコロを振る。1度目は2度目に振るサイコロの数を決め、2回目のサイコロは君に上げる力の数だ。3回目は4回目のサイコロの数を決め、4回目のサイコロはその出目を2回目の出目から引く。当然マイナスも有り得るから気を付けてね？知った事じゃないけどね」

何ともうさん臭い限りではあるが目の前にいる彼は取り敢えずこの

状況に俺以上の理解があり、なおかつ年上だ。

「取り敢えず振らせて頂きますが…もう少しこの場所について教えて頂けませんか？」

サイコロを受け取りながら尋ねれば彼はとても驚いた表情をしている。

「いや、すまないね。そういう反応は久し振りだね？年甲斐も無く嬉しくなってしまったよ。……ここに付いてか、一言で表すならば黄泉路の脇道かね？本来死者の道を行く筈でない者が通る場所だね」

「それがさっき言っていた事故死者？」

「よく聞いていたね？その通り、最近神はその存在を保てず減少傾向にあつてね？管理すらおぼつかないのだよ、困ったものだね？」
愕然とする事実ではあったのだろう。それなりにショックも受けた、だが感性がおかしいのだろうか言う程の衝撃は無くどこか他人事のように聞こえたのだ。

「いやおかしくないよ？実際そんなものだろう？特に最近は九十九神すらいらないからね。新しい神は生まれず信仰の少ない力の弱い者からこの世界に融けて逝く。ここの管理が完全に止まるのはもうすこしかかるけどね」

言い切つて少し寂しそうに微笑んだ。声をかけようとして、手からサイコロが零れ落ちた。

「一度目は6だ。運が良いのかな」

カウントされたらしく男は先程の寂しげな笑みをまるで孫を見守る翁のように温かな笑みに変えていた。

「さあ次だ」

手から擦り抜けたサイコロはいつの間にか男の手に握られ、更に5個のサイコロが増えていた。

「賽は投げられた…この言葉をそのままの形で実感することになるとは思いませんでした」

苦笑気味に受け取り、それを天に放る。向かい合う男と視線が交差した。そこにサイコロが降り落ちる。

「君のこれは幸運だ。それも君一人の力ではないね。……そう、そのハンカチと御守りだね。君を思い君の幸せを願い、力を持った者が加護を与えているんだね。きっとその元の持ち主は世が世なら巫女になれただろうね、神降ろしの巫女に」

6の目が6つともに出ている。極端な日、岐路に立つ。占も馬鹿に出来ないなと独り言でみる。

「占は神の言葉を届ける場合もある、巫女が聞き遂げたならそれはもはや宣託とも言えるのさ」

男は嬉しそうに笑う。

「これはもう君の振る賽の目は判ってしまったね？人の運はなるべく均衡を保つ習性を持つ。きっと運命に無かった唐突な死という不幸をこの場で精算させようとしているんだらうね」

男の予想通りだったのだらう。あとの二回は両方とも1という最少

の目だったのである。35もの機会を俺は死んだ事で手に入れたのだ。男曰く姉さんのおかげで。

「どんな風になりたい？」

男は外見に似つかわしくない程好好爺然とした笑みを湛え問い掛ける。

「今まで居た場所に…」

「それはすまないが不可能だ。君の死は事故死だが必然的だったのさ。君は生来魔力を持っていてね、あの世界はそれを吐き出せないたまにあるんだ、だから私が言っている事故とは君があの世界に生まれたことなのさ」

悲しい事だと男は肩を竦める。

「もう一度あの世界に君を送る事は出来る、けどね…戻った瞬間また死んでしまうのさ。身体が魔力に耐えられないのさ」

何でもない事のように、事実この男にはなんでもないことなのだろう、今もなお飄々とした態度を崩さない。

「なら、せめて家族の幸福な未来を」

「ふむ？残されたのは実の父と弟、義理の母と姉だね。…その願望、一人に付権利一つ、そして権利の譲渡に一人に付一つ…合計8個使われるがよろしいかな？」

「構いません。元々姉のおかげですし…少ない位です」

（君の死が早まったのはその加護による過剰摂取も原因だけだね。
まあ知らなくても良い事だけだね）

「残りは27個だ」

「その世界の情報を下さい」

「ふむ、君がいた世界の下位世界だよ。地球があるし大陸や国の配置もほぼ同じだ。魔法があるし気なんてものもあるけどね。あとは魔界なんてものがあつたり魔法世界も存在する。妖怪もいるね。日本の大きな魔法関係の組織は関東魔法協会、関西呪術協会だね。あとは随時疑問に応える形にしよう」

あと26だと男はカウントする。どこぞで聞いた事のある名称だが、記憶になかなかピンと来る物が無い辺り勘違いだと切り捨てる。

「根本的な質問だけど、何故こんな風に力とかくれようとするのですか？」

「君のような存在は否応なく厄介事に巻き込まれる。一度死んだことで死に近い存在になるからね。そのまま送り出すと20年生きる者すら稀なんだ。天寿真つ当を願って生きられるように力を与える訳さ、最近勘違いした人間が多いのが問題でね、廃止も検討されるのさ」

26だよと男は告げる。どうやら情報というのは意外に範囲が広いらしい。

「魔法は知らないけど、武術は俺の認識してるようなものでよろし

いでしょうか？」

「大体はね、気があるせいか色々強化されたり露骨な必殺技なんてのもあるけどね」

「俺にどの程度出来るかは分かりません、なので魔法と武術の才能とそれに適した体を頂けますでしょうか」

「うん可能な範囲だね。なんせ体とかは作り直しだからね、少し弄れば大丈夫だよ。才能は武術に2つ、魔法に3つ、気に3つ、体にも3つ権利を使うけど良いかな？ああ、才能のほうの内訳は後天的ものと先天的なもの、そして気と魔法の調整ようだ。体は気と魔力に適応させて身体能力最大値の拡張及び君の魂との調整分だね、何か削るかい？」

「いえ、それでお願いします」

「ならあと15だよ。こう言うてはなんだけどさっきの人間はケチくさいとか言つて来たんだけど、君は文句を言わないね？」

「正直なところ…才能とかがこう簡単に手に入ると逆に怖い位です…けど…」

「力…何でも良いけどそれがないと早死にするから…かな？」

「その通りです。そう考えたら不満なんて出ることすら失礼だと…」
男はなにやら嬉しそうに笑う。一体…どれだけ先に来た人は男に不満を述べたのだろう。才能…力をこんなに簡単に人に付与出来る圧倒的上位者に。気分を害すること等考えなかったのだろうか。

「呪術協会と出ましたがその世界には呪いなども存在しますか？」

「存在するね、魔法の形式は精霊魔法が主流だが呪いの類いは今も生きている」

「では呪いを解くことの出来る物を」

「ふむ、ならばこの印を渡そう。ありとあらゆる呪いを解きたい物だけ解く事が出来る。正し権利は2つ使う事になるからね？使う時は対象者の解きたい呪いを考えて額に押せば良い」

「二つで済むのなら願っても無いことです」

あと13だと男は笑いながら告げる。

「武にも気にも魔法にも…最も適した師が欲しいのですが可能でしょうか」

「人の師なら一つに付き、1つの権利を。魔法世界の人物なら一つに付き権利を2つ。人外の者なら一つに付き3つ権利を使うね」

「最も優れているのは人外の師でよろしいでしょうか？」

「よろしいよ」

「なら人外の師を武、気、魔法の全てに希望したいです」

「残りは4つだね」

滞りなく認められたのだろつ。あとの4つの使い道に悩み…ふと頭によぎったのはアニメや小説でみたあの魔法。

「精霊魔法が主流だとのことですが、空想の魔法…俺の見ていた魔法を再現するには出来ますか？」

「……残り4つの権利で使えるように下地は整えよう。君が最も強く使いたいと願った一つの世界観の魔法を、世界の境界を隔てなく…それが限界だけだよ…いいかな？」

「ではそれをお願いします」

「ではこれで決まりだ。いや、久し振りに気持ち良く送り出すことが出来るよ。新しい人生、精一杯謳歌してくれたまえ！」

そういうと男はこちらに手を伸ばし、世界が白く光黒に染まった。

さてと男は少し嬉しそうに携帯に似た何かを起動させる。

「やあ、八坂の？うん、私だよ。そう、君の元に八坂姓の男を…うん。確かその世界には魔法以外のところで妖怪の…そう、そこで師を用意してくれたまえ。…ああ、八雲だったか？あの妖怪頭とも連携を…そう、鍛えるのは武術と気の運用に魔法。戦闘経験などだ。……ああ良い子だったよ…それじゃあよろしく頼む」

……数瞬後そこは誰一人として存在していない空間となっていた。

プロローグ（後書き）

まあこんな感じで。良くある話だね？と。

あ、色々と意見疑問罵詈雑言あればどうぞ。アドバイザーも歓迎です。

幻想の生きる場所（前書き）

さて転生したこの男、名を八坂晃仁と申します。転生、死者が何らかの理由によりもう一度生を得ることであり主に大陸から伝播した思想でありますな。稀運にして奇運、しかして希運もまた幸運。死んだことで男は今までより死に近くなり、それゆえに力を手に入れるを得なかつたわけであります。

皆さまは男の願望を覚えておられますでしょうか。この男、自らの師に最も有能だという理由で人ならざる者を選択したのであります。が・・・さて、人間の枠に収まる男が人外の教えを請う、つまりは周りの環境から変えていかなければいけないわけであります。彼らにも住まう場所というものがありますからな。

当然彼らの教え方にも注意しなければなりません、なにせ彼らその道百年は当たり前、長い者なら千年単位で経験を積んでいるまさに生きた伝説なのでありますからして、普通の人間ではどうにも常識を壊されかねないわけであります。この男はその中でどのような道を歩むことになるのか・・・それでは第一話“幻想の生きる場所”始まりと御座候。

幻想の生きる場所

この世界に生を受け、最初に認識したのはどこか気高い女の人だった。

「おお、意識が芽生えたか。いや、この場合は取り戻したというベキか？」

女性にはこやかに此方を見降ろして、記憶とずれこむほどに小さくなっていた俺の頭を優しく一度撫ぜた。その奥には今の俺よりもいくらか年上だろっ女の子が容姿的には少し幼い少女に面倒を見てもらっている様子が見受けられる。

「私の名は八坂神奈子、ここで軍神なんてやっている。向こうにいるのは小さいのが東風谷早苗とちよつと大きいのが私と同じ神である洩矢諏訪子だ」

「神・・・？」

「おう！貴様も会っただろう？死んだときに面会した男、あれと似たような者だ。格でもほぼ同等だな」

瞬間、頭が明滅したような印象をもって、そしてああと思いだせることに気がついた。改めて自身の身体を確認する、立てる、歩ける、舌足らずながら喋れる。しかし手はあまりにも小さく何をするにも心もとない。

「今の貴様は3年生きた。いや、大変だったぞ？生まれた当初など力加減が出来なかったのだろうな、私と諏訪子以外触ることすらで

きなかった。早苗など可愛い弟分に触れることすらできないとふくれ面をしたものだ」

愉快だったぞと女性、神奈子さんは笑う。ひとしきり笑った後ですつとその目を細めて此方を射抜いた。その傍に従うようによつてきた早苗と諏訪子の二人、早苗は嬉しそうに此方に手を伸ばそうとするが諏訪子に止められている。

「さてと・・・意識があり、周囲を認識できるようになったのならそろそろ送り出すとするか」

「送り出すとはどこへ。」

神奈子さんの言葉に質問を投げかける、するとくすりと笑い彼女は一度指を鳴らした。

「お前が求めたのだろうか？強くなるための師を。人ならざる者に。だからそこへ送るのは必然だろう。というわけだ、三年の間に其方の体制も決まったか？八雲の」

言われ空間にひびが入り、そしてそのひびとは全く関係のないところから妙齡の・・・コホン。見目麗しい金髪の女性が姿を現した。ゴスロリのような服に日傘をもつてゆったりと彼女は此方を見つめる。

「ええ、紅魔館の魔法使いと門番、魔法の森の魔界出身の魔法使い、白玉楼の剣術指南兼庭師、千年を生きた蓬莱人、そして私とその式・・・言われた通り武術、剣術、気、魔力、西洋魔法、東洋魔法・・・求められたものを教えられる者を揃えさせていただきましたわ」

「そうか・・・ああ結構だ八雲の、私達も早苗がもう少し育ったら其方に行く、それでいいな？」

「お待ちしておりますわ」

なんとも胡散臭い笑顔で金髪の女性はその顔を扇子で覆い隠す。そして此方に歩み寄り、軽々と俺を抱き上げた。

「それではこの少年を鍛え上げる旨、引き受けさせていただきますわ。また何れ・・・数年後にまたお会いしましょう・・・全てを受け入れる幻想郷で」

「うむ、よろしく頼む」

なにやらあの男との会話以来、話の主導権がどこか違うところに放り投げられて全く関与できないうちに諸所決まってしまう。

しかしながらそれに抗ったところで行く道が見えないのも確かなもので、話を聞く限りを予測するところどうやらあの金髪の女性が俺の師となるうちの一人らしく、そして幻想郷なる場所へ行くことになるらしい。

「よろしくおねがいします」

どうしても舌足らずになることにやきもきしながらひとまず頭を下げて見る。

「博麗のとは違って礼儀正しいわね…転生してるから当たり前かしら？」

ぼんぼんと頭に手を置かれる。そのまま軽々と抱き上げられて視線

を合わせられる。

「私は八雲紫^{やくもゆかり}幻想郷で妖怪の賢者などと言われているわ。貴方には陰陽道や式神を今代の博麗の巫女に教えるついでに教え込むからよろしくね」

彼女は、八雲紫は妖怪と名乗る。見た目は人間にしか見えないにもかかわらず。

「ようかい……?」

「ええ。今から貴方の師となる者に人間はいないわ。ああ！半分人間ならいるわね」

どうやら本当にとんでも世界に来てしまったようで、俺は少しの期待と漠然とした不安に悩まされたのだ。真剣に悩む3歳児は中々シユールだったとは後に神奈子さんに聞いた話である。

「それでは八坂の軍神よ、貴女の姓をもつ転生という幻想、一時確かにお預かりいたしましょう」

「よろしく頼むぞ八雲の。その子は13でこの世界の厄介ごとに関わることが運命付られている。この10年で…そうだな先に封印された両面宿禰、あれの荒御霊ではなく本体とやり合える…もつと言えは式神として縛れる程度にはしてもらいたい」

「それだけの才がある?」

「大和の軍神の名に置いて保障しよう。それは人としての枠を超えかねない程度には力を有している。疑問に思うなら許す、境界を以

て探ってみよ」

「……分かりましたわ。では、これにて」

音も無く、世界に亀裂が入った。そこには幾つもの目が存在する禍々しい空間だった。

「行くわよ」

尤も、抵抗する暇もなくその空間に飛び込むことになったのだが。

「お待たせ」

空間から出るとそこには幾人もの女性が畳が敷かれた和室で待っていた。

「その子が言われていた転生者？」

「ええ、幽々子も何か教えて見る？」

「私はいいわくよろしくね妖夢」

「お任せ下さい幽々子様！」

おっとりした温和そうな女性に言われ、白髪のショートを揺らしながら意気込む少女。しかし彼女の側に浮く白いお餅のような物は何だろうか。

気にはなつたがひとまず周囲をぐるりと見回す。紅い髪の子ヤイナ服を纏った女性が誰よりも早くそれに気付き、人好きのする笑顔を浮かべてくれた、その隣には紫色の衣服をまとった髪の長い女性

「紅美鈴ほんめいりんです、武術と気を教えることになっています」

そして紅い髪の女性がにこやかに名乗り出す。

「パチュリー・ノーレッジよ、西洋魔法及び魔力の運用を教えることになっているわ」

「あ、魂魄妖夢こゝろはくようむです、未熟な身ですが剣術の指導に当たらせていただきます」

白い餅を浮かべた少女は魂魄妖夢というらしい、全体的に白い印象を受ける。その横の女性花のらないのかと思ってみていれば、何故か八雲さんから渡された御饅頭を美味しそうにぱくついていた。

「アリス・マーガトロイド。魔力の運用と特殊な魔法体系について教えるわ」

「あゝ私か。藤原妹紅ふじわらもこうだ。東洋魔法について教えることになっている」

金髪で人形を脇に侍らせているのがアリスさん、そして白髪で紅いもんぺのようなものを着ている・・・何故御札が至る所にあるのだろうか、まあそんな人が妹紅さんらしい。そして挨拶は順繰りに巡って何とも立派な尻尾を九本なびかせている御方に。

「八雲藍だ、式についてと君の世話を任されている。よろしく頼むな、少年」

この場にいる、幽々子と呼ばれた女性以外から名乗られ、そして全

員から何かを探るような目を向けられる。ひとしきり見られると其々がほおつと息をつき、視線による圧力が緩和されていく。

「やさかこうじです、よろしくおねがいします」

とりあえずは、俺の師となってくれと言ったくれた人たちに対して、なるべく失礼にならないように頭を下げてみたのだ。

始めの一年、この一年間が何よりも辛かったのを覚えている。美鈴さんや紫さん（先生等と言わず名前で呼んでくれればそれでいいのこと）に聞いた限り、受け皿は非常に大きく注ぎ口も人間の範疇にはおさまりきらないかもしれないと言われた。この場合の受け皿とは才能とのことで、それを聞いたパチュリーさん達の眼の色が変わったのが原因だ。

美鈴さんはまだいい、初めは体力作りといたいたが幼い身体では限界がすぐに来る、まずは気の運用と武の型から覚えましょうと体力作りの走り込み等は最低限にそれら二つを念入りにこなしていくのだから。はじめて行つた武術、美鈴さんからおしえてもらっているのは中国拳法とか大陸拳法とかいうものだが、それは非常に楽しいものだった。なにしろ子の身体が反則に近い、美鈴さん曰く常人ならば一月かかるであろうものをどうやら二時間かからずに習得しているのだ。やれば覚える、これほど何かを習つ中で楽しいものはない。

逆にパチュリーさんやアリスさんの講義は非常につまらなかった。何しろ第一声が

「まずは複数同時詠唱ができるように思考回路を増やしましょう」
マルチキャスト

この一言で俺の視界は右と左の眼で完全に別たれたのだ。右脳と左

脳で別々の事を考えられるようにするのが第一歩で、そのための訓練として視界を分けるのが効果的らしい。正直、今まで無意識でも使っていた身体の扱い方を否定されながら覚えさせられるこの分割思考は頭痛とセットだったのだ。

そしてそのあと魔力の暴走がおきないように緻密な魔力制御を根底に叩き込まれた。なにしろ絶対量だけで言えばパチュリーさんに匹敵する魔力量らしく、暴走＝死に直結するかもしれないと言われれば懸命にもなるというものだ。だがパチュリーさん、火・水・風・土・光・雷・闇の7属性の魔法の矢を常時自分の周囲に滞空させそれをアリスさんの人形に追従させて動かすというのはかなり無理があったのではないだろうか。まあすぐあとに其々の属性ごとに、幾つかの属性を合わせてと段階を踏まえさせてもらったあたり、目指す場所の難易度を教えてくれたという解釈もできるが。

剣術の師である妖夢さんは非常に面白い人だった。普段、俺に剣を教えてくれる時は非常に凜としたカッコいい少女然としているのだが、なにしろこの妖夢さん幽々子さんが関わりと途端にへたれるいや、ここまで行くとへたれというか別人であると錯覚させられるほどだ。なんだ、背後から突然声をかけられたときに出てくる「みよん!？」とかいう声は。ま、まあ剣のほうだが、実はまだ真剣は握っていない。ただひたすら木刀で剣の使い方を習っているところだ。なにせ自分の剣で自分を傷つけるなんてへまをしかねないと言われたら従わざるを得ないだろう。

紫さんはまだ準備があるらしく、というか冬眠しているらしく教えはもらっていない。というか冬眠ってあの女性は熊か・・・やめよう、悪寒がする。

東洋魔法の妹紅さんや藍さんの教えは堅実の一言に尽きる。まずは

基礎、それがどういうもののかの知識の講義、そしてようやく実技と段階を踏んだそれは覚えやすいものだった。それでもやはりその習得速度に二人して舌を巻いていたが。そう、この身体は多少の経験を積ませてもらえば何でも覚えられた。周りの師は皆一流を通り越した存在、なにせ人間の物差しで測ると彼女達の経験は一流とか達人何て言葉では効かないレベルにあるのだ。

この時、きっと俺は調子に乗っていたのだろう、いや慢心といっても良いかもしれない。けれど俺のそんな傲慢な考えは、たった一人の少女に、ただ一人の天才に出会ったことで打ち砕かれるのだ。

幻想の生きる場所（後書き）

とまあこんな感じで、やりたいようにやっています。前書き？あれは練習ですよ。元ネタわかる人いるのかな。

ちなみにこの話の主人公のコンセプトは公式チートと名高いネギ・スプリングフィールドの上位互換を作ったらどう動かせるのかな？という疑問からです。

たとえば中国拳法、ネギ君は一月を三時間、八坂は二時間かららず。魔法の属性はとりあえず師の属性に合わせて七つ、などですね。修行時間の算出ができないのでそれだけが心残りですが、ドライオマ魔法球爆発しろorzという感じで。

まあそんな感じで、これからも一週間に一度くらいのペース配分だと思いたすのがのんびりやっていこうと思います。それでは二話のあとがきで。

天才の巫女（前書き）

無事修業を始めることができた八坂という男、もつとも元より普通に生きてきた一般人でありますからして、才能という器を与えられても上手く使いこなせないわけでありますな。それを幼い時分からなじませ自分の才能を飼いならすというのがこれからの目標なのであります。

しかしこの男、師が優秀ということもありますのでしよう、いささか調子に乗り始めております。なにせ習うことは全て砂漠に水を零すかの如く吸収しているわけで、いままでそのような経験のない者が溺れ行く典型的な型に嵌ってしまったのでありますな。

そんな男の前に一人の少女があらわれるのであります。その少女は男と同じ年頃の幼い童女に過ぎないのでありますが、はて彼女はこの幻想が生きる地においてただ一人の存在であります。・・・それでは第二話“天才の巫女”始まりと御座候。

天才の巫女

全てが順調だった。与えられた才能だとしてもそう、本当にすべてが順調だった。何を習い、何を覚えるにしてもまさに水を吸い取るスポンジのように、俺は何一つつかえることなく教えられたことを自分の血肉へと変えて行けたのだ。まあそのせいで最近は少しなまけ気味だが、まあこの習熟速度なら問題ないだろうと思っている。

この二年で身体の動かし方がだいぶスムーズになった、なによりも気と魔力で自身の身体能力の底上げが出来るようになったのが嬉しいところだった。五歳という年齢にもかかわらず氣を用いて動けば肉体的には疲れることを知らないのだ。もともと、魔力と氣は反発する性質を持っているようなので行ってしまうえばエンジンを二つ取り付け別々に起動できるようになったというところだが。

「それじゃあ神社に行くわよ」

そんな時だ、散々寝ていた紫さんが唐突に現れて藍さんの講習中に俺を連れ出し・・・いや、この場合は半ば拉致したのは。一瞬あの気味の悪い空間を通ったかと思えば着いた場所は幻想郷でも重要の一つと言われた博麗神社。實際来るのは二度目だが幻想郷にはここ以外神社が無いのだから間違えようもない。

「紹介するわ、今代の博麗の巫女よ」

紫さんに言われた先を見ればそこには俺と同じ年かはたまた少し差があるか程度の女の子が一人。巫女と言われただけあって小さいながらも巫女服に身を包んだ彼女はペコリと此方にお辞儀を一つ。日本人としての性だろうか、釣られて此方も頭を下げていた。

「靈夢、こっちは軍神から預かつてる八坂よ」

お互いが頭を下げた後なので銅にも微妙な空気だが、それを可笑しそうに見ている紫さんはそのまま此方に視線を向ける。

「靈夢には今日から教えるの。貴方はそのついで」

どうやら今日かららしく、俺はそれを聞いて少し上から目線で彼女を見守ってやるうなどという甚だ傲慢な事を考えていたのだ。この考えは・・・物の数分で自尊心という下らない物と一緒に叩き碎かれるのだが。

「それじゃあまず・・・霊力の運用から行きましょう？軽い結界を張ってごらんなさい」

そう言い放ち紫さんは力の動かし方がすっかり見えるように丁寧に手順を踏んで結界を一つ張って見せる。そこで俺は次に言われるだろうことは何かと紫さんの発言に注視していたのだが。

「ん・・・こう？ああ、こうね！」

横から少し明るい少女の声、見れば彼女は見事に結界を張って見せていた。

「そう、それが結界の基本よ靈夢・・・八坂もやってごらんなさい？」

無茶言っくな！叫びたい衝動を押し殺して俺は靈夢を注視する。紫さんの発言を信じるなら彼女は今日から訓練を始めたというのだ。し

かし実際はどうだ、力の流れを見せられただけでは完璧に再現して見せているじゃないか、これが本当に訓練初日とは思えないほどに。

「紫さん、さすがに初日で流れを見せられただけでは」

「霊夢はできたわ」

「初日じゃないでしょうどうみても！」

告げると紫さんはハッと鼻でこちらを嗤い、見下すような目を向けてから霊夢の方に居直る。そしてそのまま難易度的にはさっきの基礎から数段上と思える結界を二重に展開してみせた。

「二重結界、結界をやるならここがとりあえずの到達点ね」

力の流れもやり方も呈寝に彼女は此方に見せながら展開したそれを霊夢によく見せる。するとどうだろうか、霊夢は思案気な顔を一度したと思ったら自分の霊力を弄り始めたのだ。

「ここがこうで……えっとこっちはこう！……あとはこれで……」

言いながら彼女は紫さんの力の流れを順番に再現して見せる。丁寧に丁寧にどこまでも忠実に。見る見るうちに出来上がったのは霊力と妖力の差と総量の差に違いはあれど完成した二重結界だった。

「は……え……？」

「良いこと八坂晃仁。貴方の才は確かに稀有な物……けれど何事

にも上は存在するわ。貴方の才が神に与えられたものだというのなら博麗を継ぐ霊夢の才、それは今までの博麗の巫女の積み重ねでありこの幻想郷を守護する者として神から加護を得ているわ」

優しく紫さんは霊夢の頭を撫でている、よくやったといわんばかりに。

「特に霊夢は感の良さにおいては天才的よ？それは直感でもあればこういった技術を初見で自分のものにする感の良さでもある。貴方は間違いなく天才の器にあるけれど貴方は積み重ねていないわ。だから霊夢に及ばない」

それにねと形のいい唇を彼女は歪ませる。

「貴方程度が慢心していいなどと幻想郷はそこまで甘い場所じゃないわよ？」

心臓が跳ねた、最近の自分の様子を否が応でも反芻されてしまう。ここに来た当初の懸命さはあったのか、何が何でも生き延びてやるという意味はどこにいったのかと。そう、思い返せば返すほど酷いものだ。確かに言われたことはこなしている。だが、ただそれだけだった。

気が使えて今までの世界が一変した。なにせ走るといふ単純動作、跳ぶという動作、何を取ってもオリンピックに出てはいけないレベルに達したのだからそれも僅か二年足らずで。魔力を、魔法を手に入れて世界が変わった。単純に魔法は劇薬的な魅力を出していた、なにせ今まで誰しも一度は考えたことが疑似的にでもできるのだ。光の矢、火の玉、水の鞭に土の槍、何でもできるという気になっていた。いずれは何でもできるとそう信じていた。出来ないことなど

ないと、そう思い込んでいた。

今の俺と同じ年くらい、前世とっていいのか、それを生きた感覚を入れてしまえば圧倒的に小さい一人の少女。その一人の少女の生まれ持った才に、一度死んで神様とやらに加護をもらってもなお届かないその程度の実力で。

「貴方の元は普通の人間、そろそろだとは思っていたわ。得てしてそうなるものよ？力を手に入れた人間なんてものは」

前例があるのだろう、きつと同じような態度を取っていたのだろう。気付かされたとはこの事だ。紫さんは忠言をくれた、しかしなによりもだ。

「ありがとう、霊夢」

「・・・うん？」

訳が分からないと首を傾げる様は先ほどまで初見で二重結界を作り出すという天才ではなく、年相応の少女だった。その落差がおそろくさつきまでの俺ならばいらつくものなのだろうが、何故か今は心地良い。

「紫さん、少しだけ砕いて教えていただけませんか？」

「・・・仕方ないわね」

本当に仕方なさそうにというわけではなく、例えるならそう、手間がかかる子供に対しての嘆息をもって紫さんが結界術の基礎を、力のながし方を、術の構成を教えてくれる。

「がんばれー」

気楽な霊夢の声援が何ともこそばゆい。ふと視線をそらせば彼女は縁側に座ってお茶を飲んでいたりもする。どこまでもマイペースな少女だった。

「よそ見しない！」

「ぎゃん！？」

うん、ほかの先生方からも注意されたことはあるけどいきなり上から金だらいてどうなんろう・・・？いや、ドリフ？

「あははは！」

蹲っている俺を指さしてケタケタと笑う霊夢の姿を見れば、それなりに受けているのだろうとは思えるのだが・・・不意打ちは理不尽なように感じるのだけどそこら辺はどうですか紫さん。

「アンコールをご所望？」

「結界張ってみますね！」

うん、どうやらどうにもならない相手だということだけは分かった。ある意味でこの日、俺は漸く二歩目を踏み出せたのかもしれない。博麗の巫女、博麗霊夢と八雲紫のおかげで。

ただどだ、俺はまだ知らない。霊夢もあくまで天才というカテゴリであり彼女との間に習得速度しか差が無い俺は良いように霊夢のライバル役として使われていたがそんなことはどうでもいいのだ。

俺はこの身体になって、この世界に生まれて、まだ知らない。唯一つの目的のために、全てを投げ出すという意味を。唯一つの夢のため^{ロマン}に、ただひたすら邁進していく姿を。本当の意味で自分を鍛え磨くとはどういうことかを、俺はまだ知らない。

そんなとき、それを教えてくれる人がいた。ただ真っ直ぐに進んでいくということの意味を教えてくれる人が。霊夢とは真逆の彼女は、それゆえに美しかったのだ。

天才の巫女（後書き）

こんな感じで、大体プロット組み終わった感じではネギま編に突入するのは十話からといった具合ですね。第一部の幻想郷修行編は@7話ほど続く予定。

いや、しかし皆さんが飛ばす理由がよくわかりますね修行編。毎日更新とかできれば別なのでしょうけどね、そこまで時間が取れないのが難点か。

とまあこんな感じで、次回は水曜までには更新すると思います。

努力の魔女（前書き）

八坂は本物の天才を間近に見て、その凄まじさに圧倒されたのですな、どうやら今までよりも熱心に教えを請うている様子。それでも大妖怪八雲をして天才と称される巫女にはやはり結界術等の面ではぬようでありますな。

まあ彼女は博麗を継ぐ者、その力は幻想郷でも最たるものでなければ力の均衡を保つ者として生きていけないのでありましょう、ある意味では八坂と博麗は似ているととれるわけであります。しかし男はここでもう一人、才なき者と出会うのであります。

商家に生まれその血筋には神の加護もなく、八坂とも博麗とも正反對の少女。彼女は魔法に憧れる何処までも普通の童女。しかしそこに一人の悪霊が彼女の願いに応えたのであります。才なき者が継る姿、そこに何を見出すか・・・それでは第三話“努力の魔女”始まりと御座候。

努力の魔女

霊夢と出会ってから半年ほどの時間が経過した。あの時から初心に帰ったつもりで一つ一つの事柄に真剣に取り組めるようになったと思う。事実、美鈴さんあたりは教えてくれる中でも笑顔を見せる頻度が上がっているように感じた。

そんな折だ、人里で一つの話題が駆け抜けた。曰く、商家の娘が家出したと。人里は妖怪に襲われないように作られた集落だ。幻想郷の中にたった一つだけ存在する人間の共同集合団体。その群れから離れた少女はその生死すらも絶望視されていた。しかも商家の主は家出したということだけを言っただけで理由は頑なに言わない。しかし事実として元気な少女をみかけなくなったことから家では本当だとされたのだ。

そんな噂は気にも留めていなかった。実際自分の事で一杯一杯なのだ俺は、今現在他人に何かが出来るほどではないというのはこの間の一件で痛いほどに分かっている。だからこそ耳には入れたもののそういうこともある、そんな考えて済ませていたのだ。

出会いは、妹紅さんとの鍛練が終わり、藍さんが待つ家へと向かっているときだった。何時も通りに竹林から森へというコースを歩いていたときに突然轟音が一つ鳴り響いたのだ。当然何事かと思いがした場所へとたどり着いてみれば、そこは木々が生える空間をぽっかりと開けたような場所で金髪の少女と足が無い個性的な帽子をかぶっている一人の女性が対峙していた。

デュアルキャスト
「二重詠唱！来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹けよ南洋の嵐。」
雷の暴風』《veniant spiritus aeriale

s fulgurientes, cum fulguration
iflet tempestas austrina. JOVI
S TEMPESTAS FULGURIENS」ものみな焼き尽
くす浄化の炎、破壊の主にして再生の徴よ、我が手に宿りて、敵を
喰らえ。『紅き焰』《omne flamma purgatus
domine extinctionis et signum
regenerationis, in mea manus
inimicum edat. FLAGRANTIA RUBI
CANS》同時複合術式：紅雷の降雨！」

一見して襲われている傷だらけの人間の少女、対峙している禍々し
い気を放つ人外。ことこの瞬間の判断は間違っていないと思う、少
なくとも目の前に入るのに救うそぶりも見せないというのは俺の些
細な矜持に反したのだ。

「ん、おおうまた珍しい物を！」

咄嗟にというにはいく分の余裕を持って人外は欠け月のような杖を
こちらに向け、走る赤い雷を纏った竜巻に向ける。

「マスタースパーク！」

高らかに一言、彼女は叫んだ。それは光線と呼ぶにはあまりにも太
かった、まさにごん太である。強力な魔力を込められたそれは思い
切りよくこちらの雷や竜巻を吹き飛ばして、逆にこちらに迫ってく
る。

「ファストキャスト マルチキャスト
高速詠唱！複数同時詠唱！雷を纏いて吹けよ南洋の嵐。『雷の暴
風』《cum fulgurationi flet tempe
stas austrina. JOVIS TEMPESTAS

FULGURIENS」

吹き飛ばされた雷の代わりに急遽二つの暴風を用意しあの魔力の塊へとぶつける。一度目の竜巻と二度目の暴風の重ね技。これだけやってなお此方へと突き進んでくるのだから化け物だ。

「エーミットム解放！風花・風障壁≡FLANS PARRIES AERIAL IS」

最後に暴風とともに唱えておいた風の障壁を展開、大幅に減衰した魔力の塊は最後はこの障壁にぶつかって霧散した。しかしだ、此方の魔法五つで向こうの詠唱破棄した魔法一つ分、この瞬間のやり取りだけで地力の差という物は明白になっていた。

「おや、人間にしては小器用だね。……ああひよつとして噂の転生者ってやつだったか？天賦の才と類稀な師に囲まれて学んでいるとかいう、それなら納得か。……ああ、それじゃあ生きててくれたことに礼を言わないとね？流石の私も八雲と軍神に狙われたらちと厳しいからさ」

女性はそのまま面白おかしくケタケタと、一体何がそこまで愉快なのか分からないまま笑って見せる。そして今のやり取りをみて、なお逃げ出さなかった少女は人外の横へと歩み寄りぴったりとくつついて見せた。

「私の名は魅魔^{みま}、こっちは私が魔法を教えている……」

「まりさ、霧雨魔理沙^{きりさめまじさ}」

おずおずと、少女は答える。その二人の様子に俺が早計に過ぎなか

ったことが窺えた。少なくとも、食べたり殺したりといった殊更物騒な事にはなりそうにない。

「八坂晃仁だ、早合点をしてしまったようで申し訳ない」

「なに、私のような者が傷だらけの少女の前にいれば道理だろうよ。気にするな人の子」

「しかし…妖怪側が人間に魔法を？」

「あんたは人の事を言えないだろう？ まあそうさ、私の魔法に惚れ込んだと言ってな」

「魅魔様の魔法はすごくきれいなんだ！」

瞬間、少女の目に眩しいばかりの星が輝きだした。何かものすごくキラキラしてる。そして始まる魔理沙嬢による魅魔の魔法の素晴らしさ講座。綺麗だ星の様だあんな魔法が私も使いたいんだ。言葉の濁流は美辞麗句に彩られ聞くだけの此方はそれだけで辟易としてしまっただけで熱心に魔理沙は如何に私が魔法に惚れたのか論じてくれる。

「こんな具合でね、最近人に何かを教えるのが流行っているみたいだし私も興じてみようと思っただけ、戯れに教えて見てるのさ」

視線で促されて魔理沙は目を閉じて魔力を高める。形式的には俺が主に教えてもらっている外の魔法ではなく、魔界とかに流通している魔法のようだ。力のながし方は俺よりもアリスさんの方に近い。けれど同時に感じるのはたった一つの違和感。

「火よ《flame》！」

指先から灯る火は確かに魔力の残滓を感じさせる。しかし

「そう、魔理沙はたまたま魔力を持っていた凡人に過ぎない。だからあんたや博麗の巫女のような成長速度もなければ力の元となっている魔力量も少ない。私の魔法に到達するにはその人生をかけても足りないだろうね」

それでも目の前の少女は、かつて俺が一足飛びに飛び越えた過程を、基礎の根幹となる部分をひたすらに熱心にやりとげていく。そこには霊夢が見せた華やかさは欠片もなく、ただ泥臭い物があつた。息が荒れる、汗が玉のように浮かんでいる、見れば魔力を完全に制御しきれず身体中に擦過傷が見受けられる。手が震え、足が震え、時折意識が飛びそうになりながら一人の少女がただ必死に火の玉を操っていく。

「無駄だと笑うか天才」

片目を閉じて、魅魔はこちらに問いかけた。そこには先ほどのような凄みはなく、ただの問いかけのように聞こえる。改めて俺は魔理沙を見た。どこまでも愚直、どこまでも懸命、どこまでも泥臭く、しかしその姿は霊夢を見たときに覚えた感動すらも凌駕するほど。

「無駄なわけがあるか」

「あの子はどれだけ頑張ってもお前や博麗に及ばないのに無駄ではないと？」

ああ、確かにそうか。反則気味な俺の才能、なるべくしてなる霊夢の才能。それに比べれば魔理沙の才能という器は小さいかもしれないな

い。だけど今こうして見ていると感じる。力とか魔法とかそういうのではない根底の部分で、俺は今心から魔理沙を尊敬している。精神の熟度だけでいえば圧倒的に上であるうとも、目の前の少女は俺の心をこんなにも揺り動かす。

「負けはしないさ、魔理沙がどれだけ頑張っても……俺がそれ以上やれば追いつかれる道理はないのなら。あの姿に負けないように意地を張らせてもらうよ」

「だったら私はそんなあんたや博麗に負けないようにあの子を鍛えてあげようかね。丁度森近のところにあれもあることだし……まあ期待しておくといいよ」

気安く話しながら視線は常に魔理沙へと向けて、そのひたむきなまでの頑張りを一心に見つめる。ふと、彼女の魔力が途切れ、大きく息を乱しながら膝をついた。

「絶対量が足りないなら無理してでも増やす。生死の境ぎりぎりまで酷使させて器そのものを強靱にしているのさ」

言いながら魅魔はふよふよ浮きながら魔理沙へと助言を施しているようで、それを立ち聞くにはあまりにも無粋だと判断した。ただ二つだけ魔法を残そう。

デュアルキャスト

「二重詠唱。一花の香りよ、我が仲間へ元気を、活力を、健やかな風を。活力全快《fragrantia floris, meis amicis vigor em, vitalitatem, auram salutare. refectio》一汝が為にユピテル王の恩寵あれ。《tui gratia Jovis gratia sit》『治癒』《CURA》」

周囲の木々や花を媒介にして疲労を取る魔法を、同時編み上げるのは傷を癒す魔法。その二つを金髪を汗でべっとりと張りつけている少女へとかけていく。

「……自慢か？」

やや鬱屈した感じで魔理沙は此方を睨みつける。自慢だなどともでもない勘違いだ。

「俺は絶対にお前に、霧雨魔理沙に負けない。博麗の巫女たる霊夢にも、お前にもだ霧雨魔理沙！だから」

そこで一息をついてゆっくり、魔理沙の目を睨むように見つめる。

「だからお前も魅せてくれ、お前だけの魔法を俺に。こんな見戲なんて吹き飛ばすくらい過激な奴を！さっきの魅魔とのやりとりすら霞むほど鮮烈な奴を！その時までには俺も俺だけの魔法をお前に魅せてやる！」

それは宣戦布告、そしてこれは魔術契約。互いに互いの最高を見せつけることを誓わせる言霊。俺の宣告に対して、魔理沙は眼を大きく開いてから、何故か薄らと涙をこぼした。その涙の理由までは分からない、けれど顔を上げた魔理沙は気持ちのいい笑顔を浮かべていた。

「ああ！魅せてやるとも！私だけの強烈な奴をお前に！覚えておけよ八坂晃仁！私の名前は霧雨魔理沙、いつかお前を越える魔女の名前だぜ！」

元氣いっぱいという風体で彼女は此方に向きなおり、そして俺は彼女に見送られる様に人里へと向かい、森を抜ける直前辺りからだろ
うか、歩いていたはずの自分の足が知らず駆け足を始めていた。そ
う、無性に師の教えを請いたくなつたのだ。ただ愚直に前に向かう
彼女のように、気持ちのいい生き方をしていきたいと、そう思った
のだ。

博麗霊夢と霧雨魔理沙、全く違う二人の少女。才能も、性格も、性
質も違う二人の少女。なのに俺の新しい人生は彼女達二人によつて
支えられたと言つても過言ではない、なにせ彼女達に出会わなけれ
ば俺はきつと真っ直ぐ前になど進めなかつたのだから。

努力の魔女（後書き）

一日遅れました、もしお待ちしてくださった方がいるのなら申し訳ありません。

理由は単純にバイトでした。いきなりのシフト変更はきついものがありますね。

さて、とりあえずこれで魔理沙とも出会って次回はまた少し時間が飛びます、一日ずつなんて流石に書いていられないですね、ようやく少しネギま要素もできましたし…

早くキャラクターの登場まで行きたいものです。

それではまた次回に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2849q/>

この道は未知に満ちる

2011年2月10日21時59分発行